

# 開会のあいさつ

(財) 集団力学研究所会長

(株) 西日本新聞社代表取締役社長

多田 昭重

皆さん、こんにちは。集団力学研究所の会長を務めさせていただいています、多田でございます。今日はお忙しいところ、このように沢山ご参加いただきまして、心からお礼を申し上げます。このシンポジウムは、毎年2月にやっております、今年でもう25回目を迎えることができました。また、集団力学研究所は、昨年創立40周年ということで、非常に長い歴史を積み重ねてまいりました。これもひとえに皆様のご支援のおかげだと感謝をしております。

この集団力学と申しますのは、第二次世界大戦中にアメリカで誕生した学問分野です。そして、それをいち早く日本に紹介されたのが、平成14年に亡くなりました集団力学研究所の創設者 三隅二不二先生です。三隅先生は、戦後間もなく九州大学で、日本で初めて集団力学講座を開設されました。最初は、教師の指導性などを中心に研究を進められておられましたが、その後、産業界に目を転じられ、当時九州の産業の中核を成していた炭鉱で研究を展開されることになりました。こうした活動を通して、集団力学という言葉が世間に知られるようになってまいりました。その後、この研究は地元の西日本鉄道さん、三菱重工長崎造船所、それからブリヂストンさんなどで展開されていきました。また、さらには病院、デパート、銀行、サービス業などの分野にまで広がってまいりました。

集団力学とは、集団・組織・コミュニティーなどを科学的に研究し、その成果を実践に移すということを目指す、実践的な人間科学です。おかげさまで、この集団力学研究所の研究活動は絶えることなく前進してまいりました。1994年には、三隅先生が集団力学研究の創始者クルト・レビン教授の名前を冠したクルト・レビン賞を受賞されております。また、2006年には、現在の副所長をしております杉万先生が、国際応用心理学会の名誉会員賞を受賞されています。こうしたことは、集団力学研究所が広く、この活動を国際的にも評価されている証拠だと自負しております。

本日のシンポジウムですが、「メンタルヘルス ―心の健康―」という極めて現代的なテーマを取り上げることにいたしました。昨今の新聞、テレビなどの報道で皆様もご存じの通り、最近の自殺者数は平成10年を境に急激に増えております。平成10年以降、毎年3万人以上の方が自殺で亡くなっていると。その理由は様々ございますが、うつ病をはじめとする、いわゆる心の病も相当な数ではないかと言われております。ストレスの多い現代社会を生き抜くためには、体の健康はもちろん、メンタルヘルス―心の健康―についても、細心の注意を払わなくてはならない時代になっております。私どもの会社でも、こういう心の病を持った社員が増えておりまして、非常に心を痛めております。そういう時期に、このような問題を理論的・実践的にかかわるということが、集団力学の使命であると同時に、集団力学にはそういう力が秘められていると思います。

今日のシンポジウムでは、テーマにふさわしい方々をお招きすることができました。まず、基調講演では、臨床医とミュージシャンという2つの顔を持つ九州大学大学院 人間環境学研究科教授・北山修

先生に、メンタルヘルスについて「劇としての人生—精神分析の劇的観点から—」と題してお話をうかがうことになっております。

次に、第 2 部のパネルディスカッションでは、「メンタルヘルス：こころの健康を求めて」というテーマで、それぞれのパネリストにメンタルヘルス—心の健康—について、様々な角度や切り口で語っていただきます。本日の基調講演とパネルディスカッションが、皆様方に改めて、メンタルヘルスの問題を見つめ直していただく機会になりますことを、私自身大いに期待しております。

終わりにりましたが、このシンポジウムの企画・開催にあたりましては、沢山の方々のご支援をいただきました。特に、福岡県、福岡市、北九州市、九州経済連合会、福岡商工会議所、その他沢山の方々がございますが、割愛させていただきます。大変高いところからですが、改めてご支援の方々にお礼申し上げます。私のご挨拶といたします。今日は最後まで、ごゆっくりお話をお聴きいただきたいと思います。ありがとうございました。